

2010年度は、前年度と同様、薬剤師4名、事務員2名、計6名のスタッフでスタートした。薬局においては、薬学教育6年生への制度改変に伴い、開院後初めてとなる実習生の受け入れを経験した。また、QC(Quality Control)活動として、看護師へ、リスクの高い医薬品に関するミニレクチャーを継続して行い、その活動が評価された。電子カルテ導入一年が経過し、さらなる安全な医薬品管理システム構築を目指し、ソフト面、ハード面の双方の充実を目指し精力的に活動した。

1. 実務実習生の受け入れ

薬剤師となるために必須のカリキュラムである医療現場での実務実習として、崇城大学薬学部より2名の学生を受け入れ、2.5カ月間に渡り指導を行った。日々の業務を遂行しながらの指導もあり、事前に綿密な計画を立て、日々反省と改善を繰り返しながら実習生の経験値を高めるべく指導を行った。実習生のモチベーションを維持するため、病棟活動や、ICT、NST、緩和等の各種回診にも参加してもらい、また、済生会熊本病院へ出向いてのがん化学療法に関する研修も行い、中小病院ではあるが大規模病院に引けを取らない指導ができたものと自負している。当院ならではの職種横断的な取り組み、チーム医療を通じて、医療人としての心構えについても存分に学び感じてもらった意義ある2.5カ月間であったものと考える。指導した薬剤師にとっても、指導の難しさを感じ、試行錯誤しながら取り組み、「責任ある薬剤師像」を改めて考えさせられた貴重な経験となった。

2. QC(Quality Control)活動

当院で初めての取り組みであるQC(Quality Control)活動と称して、当院の発展のため、職員のレベルアップのため、薬局では「お薬と仲良くなろう」と題し、看護師に対して、リスクの高い医薬品のミニレクチャーを継続して行った。例えば今更ながら聞くに聞けない内容(ワーファリンについて、インスリンについて等々)を、シンプルに視覚的に提示し、薬剤師が病棟および外来に出向きスマートループでレクチャーを行った。また、理解度を高めるための小テストも実施し、看護師には余計な負担を与えてしまったかもしれないが、知識の確立、さらなるレベルアップを図る手段として大いに役立ったものと考える。提示した資料についても、隨時確認できるよう電子カルテネットワーク上にアップし、ポケットサイズの小冊子も作成するなど、日常業務で有効活用できるようサポートを行った。なお、本活動が優秀な取り組みとして評価され、労力のいる活動ではあるが、継続していくことに意義があると考え、2011年度も同様に取り組んで行く。

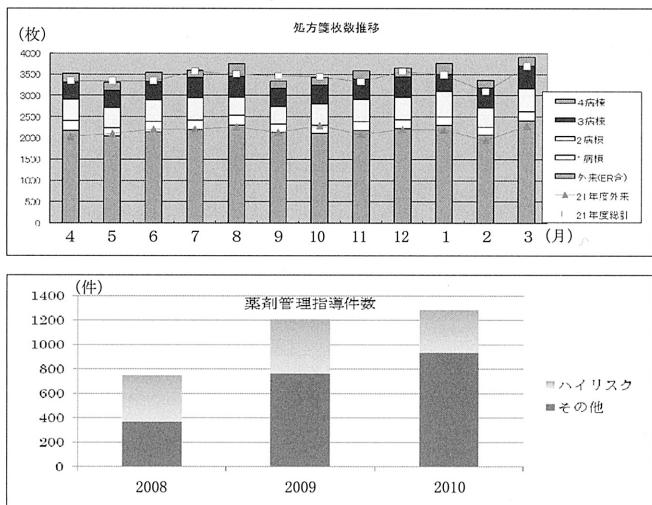
3. 外来および入院対応

外来患者数の増加と共に、外来調剤に要する業務量は年々

増加しており、2010年度も薬局の中心業務であった。その中で、電子カルテを活用し、適宜必要なデータを検索、抽出、把握し、患者さんが理解しやすいような言葉での服薬指導を心がけた。また、「Yes」「No」の問い合わせだけではなく、患者さん自らの言葉を引き出させるよう取り組み、時としてインシデントを防ぐ(ヒヤリハット)ことができた事例もあり、常に対話を意識し信頼関係の構築に努めることができたと考える。病棟においても、限られた時間内での活動であるため、チーム医療を常に意識し、病棟スタッフとの連携をうまく行いながら、患者さんに安心で安全な医療を提供できるよう努めた。また、医師の処方支援をはじめ、薬歴管理、禁忌薬管理、カルテ記録等々、一元化されたデータの効率運用にも努め、電子カルテの有効活用を推進できたと考える。薬剤管理指導業務件数についても当初目標を達成することができ、評価できる働きであった。また、2010年度も各種回診(NST回診、ICT回診、緩和ケア回診等々)への高い参加率を維持することができ、求められているチーム医療に大いに貢献できたものと考える。なお、持参薬の管理・運用については、前年同様システム上の限界もあり十分と言えず今後の課題である。

4. 医薬品管理

2010年度も新規採用薬が多く、また、外来処方日数の増加もあり、在庫管理システムを効率よく活用しながら適正な在庫管理に努めるとともに、期限切れ医薬品の低減にも力を注いだ。これら医薬品管理については事務スタッフの貢献度が非常に高く、薬局に必要不可欠な存在である。



2010年度は、電子カルテに慣れ、有効活用できるよう工夫し、おおよそ満足のいく一年だったと考える。2011年度は、新たな業務展開として注射混注業務もスタートする予定である。今後も、リスク管理をはじめとする質の高い医療提供に大いに貢献できるよう薬局スタッフ一丸となって取り組んで行きたい。